



活版印刷が  
日本を変えた  
長崎の偉人  
本木昌造

近代活版印刷の祖

# 本木昌造

## 活字に魅せられた少年時代

本木昌造は好奇心と才能にあふれた人でした。長崎市民に「てつ橋」の愛称で親しまれている日本最初の鉄橋「くろがね橋」の建設も、彼の仕事です。しかし何といっても一番の功績は、近代活版術を日本に広めたことでしょう。

本木昌造は、文政七（一八二四）年、新大工町で生まれ、十一歳の時に阿蘭陀通詞を務める本木家の養子となりました。養家で外国事情や近代科学に触れる機会に恵まれた本木少年は、製鉄と造船に夢を抱き、学問に励みました。そして西洋の技術を洋書で学んでいく過程で心を奪われたのが、精巧な印刷物でした。二十八歳

の時には、オランダ活字を手本として、自ら片仮名の鉛流し込み活字を発案するほどのめり込んでゆきます。しかしこの時製造した活字は彼にとって、まだ不完全なものでした。

その後、様々な研鑽を積み、長崎製鉄所の頭取まで務めますが、青年時代に抱いた活字への情熱が消えることはありませんでした。明治二（一八六九）年、本木は四十六歳にして、上海からアメリカ人の活版技師ウィリアム・ガンブルを招聘し、率先して活字の製造技術を習得するに至るのです。



# 活版印刷を 日本に定着させた 立役者

ガンブルの指導のもと、本木が習得した活字製造法は「蠟型電胎法」と呼ばれます。これは柘植の木を彫って原型となる「種字」を作り、それを組んで蜜蠟で型を取り、型をメッキ槽につけて、電気分解によって銅を型に付着させるという、高度な技術です。

アルファベットとは異なり、日本語の平仮名は

長崎歴史文化博物館に展示されている、3300本に及ぶ木製の活字（諏訪神社所蔵）。本木昌造顕彰会では没後150周年記念事業として、この種字が、長崎市の文化財に指定されることを目指しています。



長崎県印刷工業組合の事務所が入る印刷会館の建物には資料展示室が併設しており、「本木昌造・活字復元プロジェクト」の詳しい説明が見られるほか、貴重な資料を展示しています。



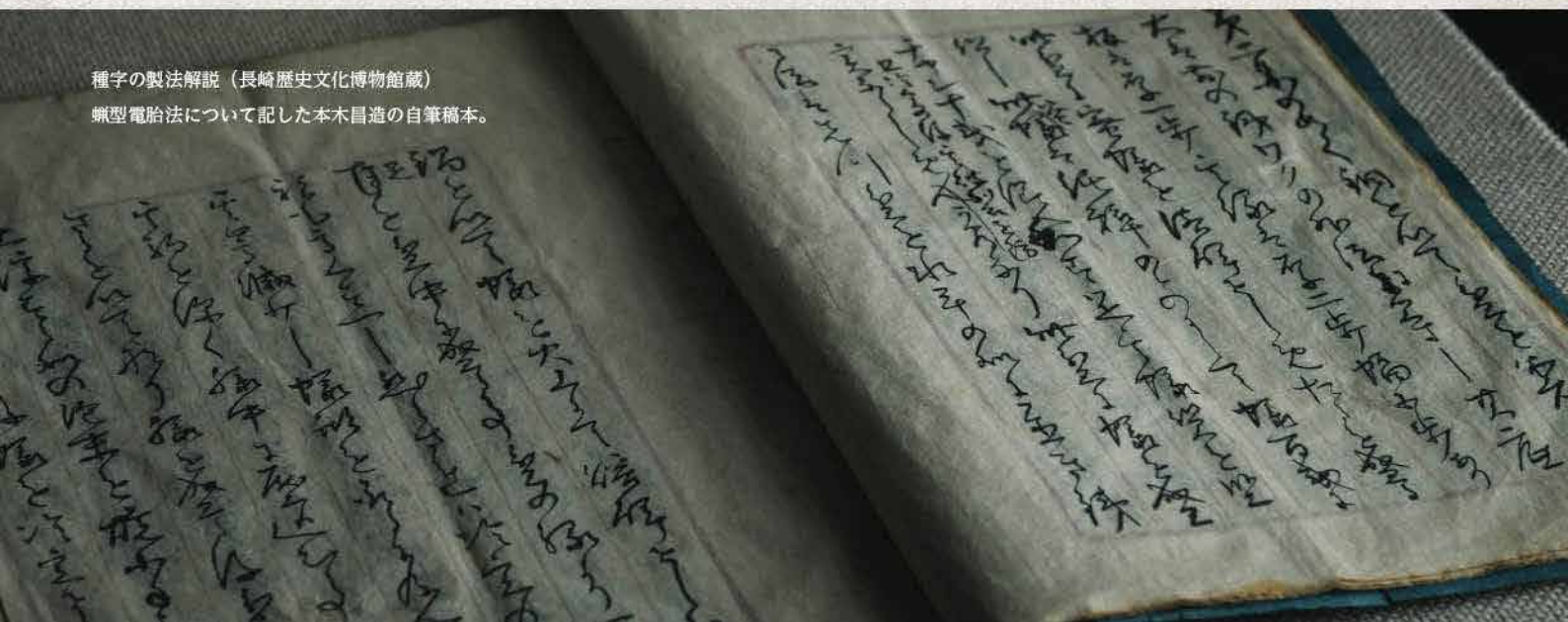
繊細な曲線を描き、さらに漢字となると複雑な字形をしています。これを小さなサイズの金属に彫るのは極めて困難です。その点、蠟型電胎法なら木に文字を彫るため、金属より容易に行うことができます。しかしながら英語とは違い、日本語には平仮名や漢字など、膨大な数の文字が存在しています。それを一つひとつ活字にしていくのは、気が遠くなる作業です。しかし本木はガンブルから、わずか四カ月で技術を学び、明治二（一八七〇）年には、「新町活版所」を設立。印刷事業をスタートしました。

長崎県印刷工業組合のメンバーで設立された本木昌造顕彰会では、平成十一（一九九九）年に、この本木昌造の活字を復元するプロジェクトを立ち上げ、活字鑄造工程を再現し、本木活字を復刻しました。メンバーたちは、このプロジェクトを通して、本木が歩んできた道のりが決して平坦ではなかったと振り返っています。

新町活版所を設立すると、本木は大阪、京都、横浜、そして東京へと進出し、次々に印刷所や活版所を設立しました。まさに、本木の手によって活版印刷術は日本に定着し、近代化は推進されたのです。

種字の製法解説（長崎歴史文化博物館蔵）

蠟型電胎法について記した本木昌造の自筆稿本。



# 本木昌造が私たちに残したものの

本木昌造顕彰会では毎年、本木の命日である九月三日に法要を行っているほか、同月にかつて活版伝習所があった長崎市立図書館にて、本木復刻活字を使用した活版印刷体験などのイベントを開催しています。

本木活字は私たちの身近な所でも見ることが出来ます。それが長崎市役所の正面玄関に設置されている「長崎市役所」「長崎市議會」という銘板です。顕彰会の毎熊一太会長はこう振り返ります。「長崎市から『長崎らしさを取り入れるために、本木活字を用いたい』というお話があった時は嬉しく思いました。しかし実現は簡単ではありませんでした」。現存している本木活字の種字の中にはすべての文字がなかったため、本木の活字が印刷された明治六（一八七三）年発行の長崎新聞（現在の長崎新聞とは異なる）の紙面から必要な字を拡大し、手作業で写し取りました。「同

じ活字でもインクのかすれ具合などで、微妙に線の太さが異なります。ようやく使用する活字を決めても、昔の新聞の小さな文字を拡大するため、どうしても文字の線が途切れてしまします。でもそれを手直しすると、本木の活字ではなくなってしまう。いかに本木活字を損なわずに再現するかが、最大のポイントでした」。苦勞の甲斐あって、完成した銘板は威風堂々たるもの。顕彰会では、これを機に、本木の功績を多くの人に知ってもらいたいと考えています。

活版印刷の技術は百二十年にわたって使われてきました。本木昌造は現在の印刷技術の土台を作った人であり、彼がいなかったら印刷業界の進歩は大幅に遅れていたことでしょう。私たちが今使っているデジタル・フォントも、その原点には長崎の偉人の活躍があったのです。



本木昌造顕彰会 会長 毎熊一太

長崎県印刷工業組合  
本木昌造顕彰会  
住所／長崎市出島町 10-13  
電話／095-824-2508  
(8時30分～17時30分、土日祝日休み)  
※資料展示室は一般公開していません。  
見学の予約は電話にてお問合せください。



# 本木昌造没後150年記念事業

2025年9月3日(水)

## 9月3日 法要当日の予定

|                                                  |             |
|--------------------------------------------------|-------------|
| 記念講演・「活版印刷が日本を変えた～長崎の偉人・本木昌造～」展見学<br>(長崎歴史文化博物館) | 13:30～15:30 |
| 本木昌造墓地 墓参(大光寺)                                   | 16:00～      |
| 本木昌造 150 周忌法要(大光寺本堂)                             | 16:30～      |
| 本木昌造 150 周忌お斎(稲佐山観光ホテル)                          | 18:00～      |

## その他の事業

- 本木種字の長崎文化財指定
- 「活版印刷が日本を変えた～長崎の偉人・本木昌造～」展  
(長崎歴史文化博物館)  
7月23日(水)～9月15日(月)  
活版印刷体験ワークショップ(長崎歴史文化博物館エントランスホール)  
8月2日(土)、23日(土)、30日(土) 各日10時～16時
- 本木活字の鋳造
- 本木関連資料の整理
- 本木活字のデジタル化

# 本木昌造先生 没後 150 年記念事業について

謹啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は本木昌造顕彰会に対し格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

当顕彰会では、9月3日の法要をはじめ各種の広報活動や展示、復刻した本木活字による活版印刷体験を毎年開催しています。

このたび、令和7年9月3日に本木昌造先生の没後150年を迎えるにあたり、中面記載の通り記念事業を実施する計画を進めております。同時に近代活版印刷の祖といわれる本木昌造先生を広く世に広報し、永くその功績を称え、活版印刷文化の継承を図るために啓蒙活動を行いたいと思います。

つきましては、大変厳しい経済状況下ではありますが、是非とも当顕彰会の趣旨にご理解、ご賛同いただき、格別のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

謹白

令和7年5月 本木昌造顕彰会 会長 毎熊 一太

長崎県印刷工業組合 HP

<https://www.nagasaki-pia.org/>

